

レナ川のほとりで思うこと

金 井 裕

サハ共和国（旧ヤクート自治区）に足を運ぶのは、今回の調査で3回目となりました。これまでは、2回ともツンドラ地帯でタイガ地帯がどのような風景なのか楽しみでした。実際、飛行機やヘリコプターからみても地平線まで続く森林というのには圧倒されました。しかし、レナ川流域でもっともハクチョウ類の生息数が多いという場所なのに、その生息密度が低いには考え込まざるをえませんでした。

私は、1995年にソデグロヅルの、1996年はソデグロヅルと今度はオオハクチョウの渡り追跡のために、インディギルカ川下流を訪れていました。というのは、日本野鳥の会と日本白鳥の会、山階鳥類研究所は共同で、青森県の小湊からオオハクチョウの追跡を行っていました。このオオハクチョウはサハ共和国の東北部に渡っていったのですが、その中の1羽がソデグロヅルの繁殖地のすぐ近くまで行ったので、ソデグロヅルの追跡調査の時に、オオハクチョウも繁殖地からの南下の渡りも追跡してみようということにしたのです。この時の追跡は、衛星追跡用送信機が壊れてしまったのか、サハリンで電波が途絶えてしまったのですが、1羽が宮城県まで来ていたのが、今回の参加者の一人である笠原氏によって確認されました。オオハクチョウについては、日本とサハ共和国北東部との渡りはほぼ確認されたと言って良いでしょう。

そして、昨年調査の時にちょっと気になることを聞きました。サハ共和国の中で、ハクチョウの数の増減が地域によって大きく異なるということです。サハ共和国の北東部ではハクチョウ類の個体数が増えているのに、他の場所では減り続けている。これは、越冬地の違いによるのに違いないというのが現地のヤクーツク生物学研究所の研究者たちの意見でした。つまり、個体数が増加している地域は日本で越冬しているハクチョウなので冬の間保護されているが、その他の地域は中国方面に渡っているため越冬環境が悪いため、数が減りつつあるのだらうということです。ですから、是非とも数が減っている場所から渡り追跡を実施したいという希望がありました。

そこで、この話を日本白鳥の会の松井先生にお伝えしましたところ、日本白鳥の会から研究助成金を地球環境基金に申請してみようということで、調査が実施されることになりました。

調査では、野営をしながら飛行機とヘリコプターで空中調査を実施し、レナ川中流域での生息状況の監視のための貴重な資料を得ることができました。しかし、生息数が少なくて捕獲できる個体がいなかったため、衛星追跡用送信機の装着はできませんでした。営巣に適すると思われる湖沼はレナ川の中州などに多く見られるのに、姿がまるでないのです。昨年インディギルカ下流域で実施した捕獲調査と比較すると、かなり低いとの印象を受けました。

かつて、中国大陸では秋に、空が暗くなるほどの数のガン類やカモ類が渡っていったということで

す。現在は、とても信じられない話です。私も何度か秋の渡りの時期に中国に行ったことがあります。が、ごくわずかの場所をのぞいて、野生の鳥類はほとんど見られません。やはり、渡りのルートが生息数に影響しているのだらうなと思いました。

情報交換という点でも有意義なものでした。ヤクーツク生物学研究所の調査では、インディギルガ川やコリマ川流域にあたるサハ共和国の東部ではオオハクチョウ、コハクチョウともにここ約10年で急激に増加しつつあるとのことでした。日本からの衛星追跡や首輪標識による調査で、この地域で繁殖するハクチョウ類の中に日本で越冬するものがあることが示されています。コハクチョウについては、アメリカ野生生物局とヤクーツク生物学研究所による北極圏一帯での空中調査が実施されていて、その結果コハクチョウが約2万5千羽記録されていて、その中の2万羽以上がコリマ川河口デルタで記録されているとのことでした。しかし、個体数が増加していること、ハクチョウ類の生息密度が高い場所でガン類の減少が著しいことから、ハクチョウ類の増加がガン類の生息状況を悪化させているのではないかという懸念がもたれ、ハクチョウ類への狩猟許可を求める地元の声が大きくなっているとのことでした。

日本で越冬するハクチョウ類の保護が進んだ結果、繁殖地域での生息数密度が回復したことは喜ぶべきことですが、その結果繁殖地で狩猟により生息密度を押さえる必要が生じているとなると、考え込まざるを得ない点もあります。ただし、実際の生態調査に基づいた対策を考えなければ危険とも感じました、ハクチョウの食物を調べてガン類との競合の有無など繁殖地での生態調査を進める一方で、日本においても総数の把握だけでなく、繁殖地の繁殖成功率を推定できる成鳥と幼鳥との比率の把握と分析を進め、繁殖地と連携をとった保全対策を立案して進めて行くことが必要になって来ていると感じました。

一方で、サハ共和国の中央部では今回の調査でも示されたように生息密度が低く、しかも減少傾向にあるとのことでした。繁殖地での環境条件はほとんど変わっていないため、この地域による生息密度や個体数の変化傾向の違いは、渡りコースや越冬地での保護状況の違いにあると考えられているわけです。中央部では、地域個体群の絶滅の可能性も出てきているので、越冬地を明らかにしてその保護を進めることは急務であります。衛星追跡はできませんでしたが、アジア全体を視野にいれてハクチョウ類の保護を考えると、国際的に情報を交換して保全対策を進めて行く必要性が高いことが改めて示されたと思います。

今回の調査をお手伝いさせていただいた日本野鳥の会としても、この点を心して活動を進めて行きたいと考えています。